The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Structural Synonymity と言語理論
Author(s)	加藤, 主税
Citation	Osaka Literary Review. 1972, 11, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25750
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

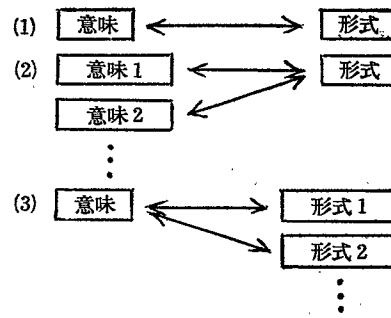
The University of Osaka

Structural Synonymity と言語理論

加　藤　主　税

1. 言語と言語形式

言語は話者の「心的内容」である「意味」，その具体的表現である「言語形式」の二面をもっている。この二面性から次の三つの場合が考えられる。



このうち(1)は，厳密にはほとんど存在しない。そして(2)は言語の ambiguity ということであり，言語の伝達機能からみると大きな欠点となっているが，その文脈，環境によれば，ambiguity にならない場合が多い。文学作品の場合は ambiguity を利用してすばらしい効果をあげているものもある。[(1)] (3)の場合は Synonymity ということであり，より多くの Synonymous な文を関係づけるという目的に沿って，言語理論は発達してきたと思われるが，ここでは種々の言語理論における Synonymous な文を，その理論の歴史に平行して見てゆきたい。Synonymity は色々なレベルで考えられるが，ここでは文のレベルに限ることにする。

2. 意味と言語形式との不平行性について

すでに述べたように意味と形式とは，一対一に対応しない。人は無限に

増加する概念にいちいち新しい言語形式を創造することはまずなく，既存の語や語結合を新しい意味に転用する。又，ふつうの言語生活で種々の思考形式を一々弁別して，それに正しく対応する言語構造を与えることはできない。多くの場合なんとか意味が通じればよいのである。そこで在来の言語形式を比喩的に転用することが行われる。同一の語が色々の意味をもったり，同一の文法形式が色々の機能を果すのはそのためである。[(2)] そして異なる言語記号が同義語として同一のものを意味したり，異る文法形式が同一の事実を意味することもある。これは外部言語形式が直接意味と融合せずに，その間に比喩的な表象をなすものは，真に意味されたものではなく，これに対して象徴の役をしているにすぎない。この象徴は意味を喚起するための手段にすぎないから，やはり言語形式に属する。これを内部言語形式と定義している。[(3)] つまり音声により，感覚的に知覚される外部言語形式に対するものとして，意味に随伴する副次表象である内部言語形式を導入しているのである。内部言語形式は意味をある言語のパタンに移しかえるそのパタンのことであり，深層構造に酷似した概念であるが，ここでは，その関係についてはふれない。

Ambiguity や Synonymity の生ずる言語の不平行性は，言語を理論の上で考えていることであって，実際に言語活動がなされた場合は，Ambiguous 表現も場面によって意味がきまり，Synonymous 表現のうち選ばれて表現されたものは，他の可能な表現に対し，理論上には Synonymous であっても，それのもつ感情的色彩は同一ではない。意味論で「同一意味をもつ異なる形式は存在しない。」とか「異なる形式は異なる意味をもつ」とかいうことと同じである。特定の表現の価値が問題とされるのが，文体論であり，これは Speech の学であり，辞書と文法の問題はLanguage の学である。[(4)] ここでは Language の立場に立っているものとする。

3. 変形と転換と paraphrase

一つの意味に対して複数の言語形式が対応しているのを Synonymity というが，これを調べるには，まず文の転換，paraphrase，変形等の概念

を区別することから始めなければならない。

(1) Silence gives consent.

(2) If nothing is said in answer to proposal or suggestion, we may assume that it is agreed to.

(3) Silence is a sign that a person has given consent to a proposal.[5]

(1)に対して，(2)は paraphrase であるが，(3)は文の転換とも見られるし，paraphrase とも考えられる。そして文の転換と paraphrase との区別として次の2点があげられる。[6]

(a) 文の転換が文の構造上の種類の変化に重点を置くのに対し，paraphrase は意味の解説を主目的とする。

(b) 文の転換がひとつの文を単位として行なわれるのに対し，paraphrase は文中の語句について行う場合もあり，いくつかの文の集まりについて行う場合もある。

(4) The weather was too bad for us to go out.

(5) The weather was so bad that we couldn't go out.

(6) Because of the bad weather, we couldn't go out.

(7) As the weather was very bad, we couldn't go out.

(8) The weather being very bad, we couldn't go out.

(9) The weather was very bad, so we couldn't go out.

(10) The bad weather prevented us from going out.

(11) We couldn't go out, for the weather was very bad.

(12) The bad weather made it impossible for us to go out.

(13) The bad weather kept us in.

(14) We had to stay in because of the bad weather.

(4)—(12)は文の転換と言える。しかし，(13)，(14)は単なる転換ではない。つまり go out という語句が含まれていない。(4)—(12)はすべて，go out を含んでいる。Harris の Discouse Analysis では「二つ又はそれ以上の構文があって，それらに含まれるNとかVの類の数が同じ*n*個で，かつその類のメンバーが同じ*n*個の組である時，それぞれの組は互いに変形関係に

ある[7]」と言っているが，その説によれば，(13)，(14)は変形関係ではなく，さらに，(10)(12)も変形関係ではない。転換と paraphrase との区別は存在するようであるが，境界ははっきりしないようである。

変形と転換とは大きな相違がある。すなわち，転換は教授のために，言語運用を目的に考えられたものであり，変形は生成文法理論の特色ある産物である。しかしながら変形という概念は転換から発展してきたものであることは，はっきりしている[8]。転換は次のような性格をもつ[9]。

(a) 一つの構造から別の構造に書き換えられること。

(b) 書き換えの左辺と右辺を入れかえてもよい。

(c) 分析は直感的になされる場合が多い。

(d) 右辺，左辺の少なくとも一つの要素の対応という制約が存在するように思われる。

一方変形は次のような性格をもつ。

(a) 一つの句標識を別の句標識に写像する操作である。

(b) 深層構造と表層構造を結ぶ働きをする。

(c) 文法的な文を選び，非文法的な文を排除するろ過機能を持つ。

(d) 明確な形に形式化されている。

(e) 言語能力の記述という目標があるため，その与えられる位置に種々の制約がある。

転換と変形とはこのような相違が存在するが，もっとも根本的なちがいは，変形は言語の重層性ということを念頭においたものであるということである。変形操作を特色とする生成文法理論はまだ発展途上にあり，依然流動的である。そしてこの理論の出現理由，あるいは発展理由のひとつが，より多くの構文の関係化，そのために深層構造を導入したと言ってよい。つまり，複数の構造の異なる Synonymous 表現を単一の共通な深層構造を使って，どう関係づけるかということであり，Synonymous 表現でも，その構造の差が大きければ大きいほどより深い深層構造が必要となってくるのである。ここでは伝統的な表現文法としての文の転換を，言語事実のデータとして用い，今後の変形理論の行方を探ってみることにする。

4. 深層構造と文の転換

4.1 補文及び名詞構文

(15) I expect that he will go. (複文)

(16) I expect him to go. (単文)

(17) I expect his going. (単文)

(16), (17)は(15)の複文を単文に転換したものである。Jespersen は him と to go, his と going を Nexus 関係と言い，これは，主語と動詞の関係であり，(15)の that clause に対応するといい，暗に言語の重層性を示していた。[10] これを明示的に形式化したのが変形理論である。それによると(15)(16)(17)は(18)のような共通の深層構造をもっている。[11]

(18) $[_{S}\ I\ [_{VP}\ \text{expect}\ [_{NP}\ [_{N}\ \text{it}]\ [_{S}\ \text{he will go}]_{S}]_{NP}]_{VP}]_{S}$

(18)から "that"complementizer か "for-to" complementizer, か "POSS-ing" complementizer のどれかをとる Complementizer Placement Transformation (TCP) がほどこされ，それぞれ3つの中間構造が生成される。これら各々に TIPD とか TE とか種々の変形がほどこされて(15)(16)(17)の表層構造ができるのである。この場合 expect は三つすべての complementizer をとるが，動詞によっては，三つをすべてとるとは限らなくて，これは，lexicon の段階で，complementizer のとり方が表記される。(18)の it はより大きな普遍性を目指して導入されたものである。

(19) the new shoes

(19)は Jespersen によれば，Nexus ではなく，Junction である。しかしこれも深層ではすべて Nexus となっていると主張する学者が増えている。[12]

(20) $[_{NP}\ [_{NP}\ \text{the shoes}]\ [_{S}\ \text{the shoes are new}]_{S}]_{NP}$

(20)の深層構造から，関係節変形，be deletion 変形，形容詞変形等の一連の変形によって(19)になる。

(21) This is the book which was written by him. (複文)

(22) This is the book written by him. (単文)

㉑㉒は同じような方法によってうまく説明される。さらに，his kindness, her arrival 等のような名詞構文を含んだ単文と clause との転換はかなりの程度まで上の方法で明示的説明が可能である。

4.2 受動態

態の転換は変形文法の中でも最もうまく形式化できる変形の一つである。つまり受動態の文はそれに対応する能動態の文と共通の深層から出ていると考える。ここでは形式化された Passive Transformation をあげるにとどめる。(13)

㉓ Passive Transformation—Tp(usnally optional)

$$\begin{array}{cccccccc} X & NP & AUX & V & (PREP) & NP & by+P & Y \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 & 8 \end{array} \Rightarrow$$

1, 6, 3, 4, 5, ϕ, 7, 2, 9

by＋P は仮設要素であって最初から深層構造に存在している。

㉔ Many arrows didn't hit the target.

㉕ The target wasn't hit by many arrows.

㉔㉕は同一深層構造から出たもので，一方では受動変形がほどこされたが，一方ではなされていないだけの差であるはずであるのに，事実は大きな意味の差が生じている。こういうところから生成意味論が生じてきたとも言えよう。変形によって，意味が変わることもあるとする標準理論に対して，生成意味論では，変形は意味を変えなくて，反例と思えるものは，深層構造の不備からくるので，深層構造をより深くすれば，説明できるとしていて，深層構造を不用とし，より深い意味表示という概念を導入している。(14) 深層構造で説明できる文の転換とできない転換があるが，深層構造で明示的説明ができないものについては5であつかう。

4.3 話法の転換

直接話法で伝達文が疑問文の場合は㉖のようになる。(15)

㉖ $\underset{VP}{[}\ \underset{V}{[\text{said}]}\ \underset{NP}{[}\ \underset{N}{[\text{it}]}\ \underset{S\ NP}{[\text{QUESTION S'}]}\ \underset{VP}{]}\ \text{to NP}]$

$$\Rightarrow \underset{VP}{[}\ \underset{V}{[\text{asked}]}\ \text{NP}\ \underset{S\ VP}{[}\left\{\begin{array}{l}\text{if}\\ \text{wh-}\end{array}\right\}\text{S'}]\ ]$$

さらに伝達される文が命令文の場合は(27)である。

(27) $[_{VP}$ [said]$_{V}$ [[it]$_{N}$ [IMPERATIVE S']$_{S}$]$_{NP}$ to NP]$_{VP}$

$\Rightarrow$ [[told]$_{V}$ NP [for-to S']$_{S}$]$_{VP}$

そしてこれらの規則にさらに時制の一致や副詞選択の規則や伝達者，被伝達者の移行規則もなされなければならない。そして伝達文が感嘆文，祈願文，あいさつ文となると特殊な複雑な規則が必要となってくる。これらはあまりにも複雑な規則体系になり，各々別の深層構造から導き出されると考える方がよいという意見もあるが，より多くの一般性を言語理論に求めるならば，共通の深層構造から生成されるという方向に進むべきのように思われる。そして，できるだけ多くの Synonymous 表現を共通の深層構造によって関係づけるのが現に今進んでいる理論の動きである。

4.4 命令文 +and

(28) Drink your milk and I will take you to the circus.

(29) If you drink your milk, I will take you to the circus.

(28)(29)はの(30)深層構造から，同一の文のどちらかを消去することによって得られる。(16)

(30) IMPERATIVE you drink your milk and if you drink your milk then I will take you to the circus.

さらに(31)(32)は(33)から "and NEGATIVE" は "or" になることによって生成される。

(31) Drink your milk or I'll tweak your nose.

(32) If you don' t drink your milk, I'll tweak your nose.

(33) IMPERATIVE you drink your milk and NEGATIVE if you drink your milk then I'll tweak yournose

5. 意味表示と文の転換

(34) The physicist hardened the metal.

(a) The physicist caused the metal to become hard.

(b) The physicist caused the metal to become harder.

(34)は (a)(b)の二文に転換できる。つまり(34)は ambiguity なのである。harden を〔causative〕〔inchoative〕hard (harder) というように抽象的な feature を使って分析している。(17)

このレベルは，深層構造より深いので，意味表示と呼ばれ，深層構造は不要で，この意味表示のレベルが必要であるというのが，生成意味論派である。この分析方法でゆけば，(35)のようになる。

(35) kill＝〔causative〕＋〔die〕

show＝〔causative〕＋〔see〕

become〔inchoative〕＋〔be〕

(36) I broke the window.

(37) The window was broken by me.

(38) The window broke.

(36)(37)は標準理論からも，受動変形によって説明できるが，(38)は説明できない。そこで格文法の枠組によれば，次のような深い構造から三つの文が体系的に説明できる。(18)

(39) 〔〔〔past〕〔〔break〕〔〔by〕〔I〕〕〔〔ϕ〕〔the window〕〕〕〕
S MP VA K NP AO K NP O P S

(38)は(39)の深い構造からAに topicalization rule が作用され，by の消去変形がほどこされ，そして，(37)はOに topicalization rule がほどこされ，さらに(38)も同様にして生成される。

さらに次のような構文も同一の構造から生成される。

(40) A fan is in the room.

(41) There is a fan in the room.

(42) The room has a fan in it.

これらは(43)の深い構造からそれぞれの変形によって得られる。

(43) 〔〔Pres〕〔〔ϕ〕〔〔ϕ〕〔a fan〕〕〔〔in〕〔the room〕〕〕〕
S MP VO K NP O L K NP L P S

(43)からOに topicalization の規則がかかると be が導入されて(40)になり又，there is 導入規則がほどこされて(41)になり，(43)のLに topicalization

がかかると have が導入されて，(42)が生成される。

6. 意味表記と言語理論

このように同一意味で形式が異なる，Synonymous 表現をより統一的な規則で関係づけようとする方向を歩んできた。つまり，最初にあげた(4)—(12)はいうまでもなく，(13)(14)という paraphrase に近いと思われる文まで同一深層の派生文という見方になってきている。そのうち(10)(12)(13)(14)は従来の深層構造より深い抽象的なレベルでの構造でなければ説明できないと思われる。

(44) prevent=〔causative〕〔negative〕〔permission〕
make impossible=〔causative〕〔negative〕〔permission〕
keep=〔causative〕〔positive〕〔permission〕
can=〔positine〕〔permission〕
go out=〔positive〕〔outside〕
stay in=〔negative〕〔outside〕

(44)のような feature に分析し，さらに接続詞選択規則等一連の規則によって，統一的に説明し得る。

深層の文法表示はだんだんより抽象的になってくるので，そしてそれらはより異なった表現を関係づけるよう要求されるので，深層構造はそれらの表現の意味の直接的な写しに近くなってくる。[19] 音形論における distinctive featuresのようにもっとも深い universal な意味表示あるいは文法表示ができれば，同一言語内での Synonymous 表現は言うまでもなく，外国語への翻訳を含む普遍的な体系が可能であろう。Fillmore は「文の深層構造は誰が，何を，誰に，何のために，何で，どこで，いつ，どのようにして，なぜ，ということを直接的に表記するようになるであろう。」と言っているように，[20] 意味をもっとも純粋に記述する方法としては，記号論理学的なものに近い方法が考えられるが，これと言語学的なものとどの点で融合させるかが大きな問題である。さらに残された問題として，

(45) Give me some water.

(46) I want to drink some water.

(47) I'm thirsty.

(45)〜(47)のような Synonymous な表現をどう処理するかが，今の理論の進路における大きな試練となるであろう。これには今開拓されている presupposition の問題とか，pure meaning と cognitive meaning 等の語用論の立場からの問題等もかかわり合いをもってくると思われる。

注

(1) Empson, William, *Seven Types of Ambiguity.*

(2) 中島文雄「文法の原理」1949.

(3) 中島(1949)

(4) 中島(1949)

(5) 江川泰一郎「文の転換」1968.

(6) 江川(1968)

(7) 大塚高信編「新英文法辞典」1970.

(8) Chomsky の前期の理論 (Syntactic Structures 1957) では，変形は表層構造同志の結びつけの働きしかもっていなかった。

(9) 平河内健治 "文の「転換」と「変形」" 1968.

(10) Jespersen, MEG.

(11) Rosembaum, *The Grammar of English Complement Constructions*, 1967.

(12) Emmon Bach, Paul Postal, James McCawley, D. Terence Langendoen 等，詳細は Langendoen, *Essentials of English Grammar* 1970.

(13) Rosembaum (1967)

(14) Lakoff and Ross, "Is deep structure necessary?" 1967

(15) 平河内(1968)

(16) Jacobs and Rosenbaum, *Grammar III and Grammar IV, An Introduction to Tansformational Grammar*, 1970.

(17) McCawley, "Meaning and the description of languages," 1967.

(18) Fillmore, "The case for ecase," 1968.

(19) Lees, "On very deep grammatical structure," 1970.

(20) Lees (1970)